あとがき

摂津と播磨の旧幕領を中心に、小さな第一次兵庫県が生まれたのは、慶応四年五月二十三日（一八六八年七月十二日）のことであった。それは、同年九月の明治改元に四ヶ月先立ち、一八七一（明治四）年の廃藩置県より三年も前のことであった。この小さな県が、五国の広がりをもつ現在の兵庫県のかたちに転ずるのは、一八七六（明治九）年の大合併を通してであった（『兵庫県史〜この五十年の歩み』第一巻序参照）。

兵庫県は、最初の県誕生から百年を期して、一九六七（昭和四十二）年に『兵庫県百年史』を刊行した。そこには、世界への玄関港・神戸を擁する雄県兵庫が近代化の道を歩みながらも、第二次世界大戦末期の一九四五（昭和二十）年には米軍の空襲により都市部が壊滅的打撃を蒙ったこと、そして敗戦と占領を経て、民主化改革と高度経済成長の時代へと突き進むに至った戦後のわが県の諸相が語られている。

二〇一八（平成三十）年は兵庫県誕生から百五十年である。それを期してさまざまな「県政百五十周年記念事業」が企画されたが、その一環として先の百年史に五十年史を書き加え、百五十年の県史を完成することが企図された。当時の井戸敏三知事がこれを発議したのは二〇一七（平成二十九）年のことであり、四月に県史編纂室がひょうご震災記念二一世紀研究機構に設置され、十二月六日には第一回の県史編纂委員会（五百旗頭真委員長・御厨貴副委員長と九名の委員・三名の顧問）が開催され全体方針を検討した。同時に実務を担う

県史編集会議（御厨座長・福永文夫副座長と十三名の委員）も開催され、各分野の執筆者や担当分野の割り振り等を検討した（メンバー構成については巻末資料参照）。

検討を重ねる中で、「この五十年」は、先立つ百年史の半分の期間に過ぎないが、内容は豊富にして重要であることが認識された。高度成長とそのひずみに対応する県政の展開を前半の二巻とし、阪神・淡路大震災の勃発と応急対処・復旧及び創造的復興、それに続く行財政改革と平常への復帰の時代を後半の二巻、計四巻として刊行することとなった。

自治体史の通例では各時代ごとに執筆者を置くが、本書では行政、経済、文化などの各分野ごとに二十九名の執筆者を定め、その人が原則として四巻を通してその分野を書き通す方針をとった。四巻は時代区分に依拠しているが、それぞれの分野はタテ糸として整合性を持つ記述が望ましいと考えたからである。つまり各巻毎に読めばその時代が分かり、分野別にタテに読めばその分野の五十年史となるように配慮した。

各専門分野を超える県史の全体像を理解する一助として、長くこの県に寄り添ってこられた新野幸次郎顧問に二〇一八（平成三十）年二月、また五国の広がりについては井戸顧問に二〇一九（平成三十一）年四月に、それぞれ講義をいただいた。また執筆者には必要な県の資料を提供する措置がとられた。

多数の執筆者による大きな出版は、予想以上に時間がかかるのが常である。加えて、本出版の場合、運悪く執筆活動が本格化すべき二〇二〇年初よりコロナ禍が猛威を振るったことにより、活動は休止もしくは鈍化を余儀なくされた。

それでも、編纂委員会の立ち上げから五年を経て、二〇二一（令和四）年度末にようやく第一巻と二巻、その一年後には第三巻と四巻の、全巻発刊にこぎつけることができた。遅れながらも完成に至ったことは、

もとより各執筆者の責任感と力量のお陰であるが、全体監修の労をとられた福永文夫教授の不屈の意志と、白井重孝、白石豊両室長をはじめとする県史編纂室事務局の揺らぐことのない尽力が大きかったと思う。

一般に多くの自治体史は不偏不党、客観的中立性のたてまえから、解釈や意味づけを欠いた具体的事象の盛り合わせに傾きがちである。正確な実証的記述の重要性はいくら強調してもし過ぎることはないが、かと言って意味づけを欠いた断片的事実のつぎ合わせでは歴史の名に値しない。困難な状況の中で、県と県民はどう生きてきたのかが浮かび上がるような県史でありたい。何故、どんな意図と事情から、県独自の姿が形成されたのかを説き明かす県史でありたい。多数の執筆者から成る公的県史が過度に個性的な歴史解釈に傾くことは慎むべきであるが、個々の事象を超えて五十年もしくは百五十年の兵庫県史が日本史全体の中でどのような役割を果たしたかについて、この出版を基に議論が活性化することを期待したい。

その観点から、日本を代表する政治史家の御厨県史編集会議座長が巻末総括の一文において、この五十年を「起承転結」型の展開として全体的に論じられたことに謝意を表したい。五国から成る本県の地域的多様性を、県全体の創造力と関連づける見方も示唆に富む。

こうして県史を振り返る中で改めて感じることがある。そもそも兵庫県は、神戸港の両側、阪神と播磨の臨海に重化学工業群を立地させ、戦後日本の高度経済成長推進軸の一翼を担った。それでいて県は高度成長のひずみをいち早く認識し、全国に先がけて一九六〇年代後半から公害対処の施策を開始した。さらに全県に緑の回廊をめぐらし、県民緑税の創設をあえてして、豊かな自然環境を保全育成し、心豊かな県民生活の土台とした。福祉の充実にも独自の教育にも力を注いだ。わが県が住民尊重の基本を見失ったことはなかったと思う。

人間尊重を一方の土台としつつ、先端的なもの・偉大なものへの憧れが止まないのもこの県の伝統である。一九八五年のプラザ合意後の急速な円高不況により兵庫の誇る臨海工業群が危機に陥った際、打開策として打ち出したのが「科学技術立県」であった。重厚長大の既存産業群に先端科学技術という付加価値を結びつけることで危機をしのぎつつ新時代を切り開き、今日のＳＰｒｉｎｇ－８、スーパーコンピュータ「富岳」、さらには水素エネルギーを推進する本県を生み出した。

何よりも、阪神・淡路大震災への対応に、兵庫県らしさが示されたと思う。多くの場合、大災害の被災地は復旧も思うに任せず苦しむものである。なのに兵庫県は、上記御厨文にあるように創造的復興を掲げて、いくつかの事業を実らせた。さらに、一三七万人のボランティアが湧き出たことを受け、三年後にＮＰＯ法と被災者生活再建支援法の二つの立法の成立を得て、民が官とともに公共性を担う「参画と協働」時代の創出に向けて全国をリードしたのである。

こうした伝統を築いてきた県の先人たちに敬意を表するとともに、長引いた我々の作業を見守り、最後まで支援を惜しまなかった井戸敏三、齋藤元彦二代の知事にわたる県に心から御礼を申し上げたい。

令和六年三月

兵庫県史編纂委員会委員長　五百旗頭　真

＊五百旗頭真先生は「あとがき」を成稿された令和六年三月六日に逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。